

異なる場所からの声を聴く

—立木・仲ら・西論文へのコメント

高木光太郎*

<要旨>

映画「ブレードランナー」の "tears in rain monologue" として知られる回想シーンでは、逃亡した人造人間が死の間際、自身の個人的な経験を想起して、追っ手である人間に語り聴かせることで、人間との間に絶対的な「距離」を生み出し、追う者と追われる者という暴力的な関係から束の間であるが自由になる様子が印象的に描かれていた。想起がこのように聴き手との間に絶対的な「距離」を生み出すのは、他者が共有困難な時空間的持続として現在の環境を探索する行為であることによる。本特集に掲載された3論文（立木論文、仲ら論文、西論文）は共に、こうした絶対的な「距離」に隔てられた時空間的持続から発せられる声に対して、その外部にいる他者がどのような姿勢を取り得るのかという問題に重要な洞察を与えてくれるものであった。精神分析のセッションを扱った立木論文と、司法面接を扱った仲ら論文では、個人的な体験の想起をいかに「聴く」のかが問題になっていた。いずれの場合も、聴き手は体験者の自由な語りに干渉しないことによって、体験者の個人的な水準に由来する不自由さ（亀裂）を浮かび上がらせ、評価的、解釈的な介入は想起が終結するまで意図的に遅延させるという姿勢がみられた。一方、痛みを経験を扱った西論文では、個人的な身体的経験として痛みを表現する患者と、医療者としてそれに対処する在宅看護師や医師が、それぞれの姿勢を「ある程度」維持したまま相互に接続することを可能にする媒介物を通して接続されていた。想起や痛みを語る声に対するこのような聴き手の姿勢は、コミュニケーションを社会的な水準ではなく、個人的な水準での人々の出会いとして捉える可能性を示唆するものであり興味深い。

1 暴力と想起

映画「ブレードランナー」で最も印象的なシーンの一つ、"tears in rain monologue"として知られる短い独白には、回想が生み出す「距離」が印象深く刻まれている。

2019年のロサンゼルス。高層ビルと無秩序な看板に埋め尽くされた人口過密の都市には、酸性雨が止むことなく降り注いでいる。「ブレードランナー」リック・デッカーの任務は、この街に潜伏する人造人間「レプリカント」を見つけ出し「解任（射殺）」することである。

デッカーが追うレプリカントの一人であるバッチィは、3人の仲間と共に地球外で叛乱を起こして逃走していた。「安全装置」として4年に設定されている彼らの寿命の制限を、製造元のタイレル社で解除させるのが目的だった。

だが共に逃亡した仲間は次々に「解任」され、寿命の制限解除も技術的に不可能であることが明らかになる。バッチィは、死を間近に感じながら、自分を追跡しているデッカーに逆襲を仕掛ける。

圧倒的な身体能力をもつバッチィに指を折られ、ビルの屋上に追い詰められたデッカーは、建物から飛び出した鉄骨にぶら下がり、転落寸前でもがいている。それを冷ややかに見下ろすバッチィ。だが、デッカーがいよいよ力尽きそうになったとき、なぜかバッチィは彼を屋上に引きずり上げる。

唸然としてへたり込むデッカー。雨が降り続く。

唐突に、バッチィの静かで短い回想が始まる。

「おまえたちが信じられないようなものを私は見てきた。オリオンの肩口で燃えあがる戦艦。タンホイザー・ゲートの近くで暗闇に瞬くCビームも。そんな瞬間もやがて消えてしまう。雨の中の涙のように。死ぬ時だ。」

バッチィは目を閉じ、動かなくなった。

なぜバッチィはデッカーの死ではなく、回想を末期の選択としたのか。

ブレードランナーとレプリカントの間には、追う者と追われる者、殺す者と殺される者という暴力に媒介された関係が常に存在していた。暴力は、相手に接近し、触れ、変形し、破壊することで達成される。密着を志向するという点で、暴力は抱擁やセックスと一続きである。暴力を通して二者は（一方の意図とは別に）分離困難な一対の関係の中に投入される。追う者と追われる者の立場が逆転してもこれは変わらない。バッチィがデッカーを追い詰め、殺すことは、デッカーに密着し偏った抱擁をすることを意味する。それはバッチィがこの対の関係の中で、自身をレプリカントとして再度位置づけることに他ならない。寿命がほとんど尽きかけている今、デッカーを殺すことは、レプリカントの呪いの中に自分を永遠に封印することを意味する。

一方、バッチィの回想はデッカーとの間に絶対的な「距離」を生み出す効果を持って

いた。

回想などの想起を脳内に保存された記憶表象の検索や出力の過程として捉えることは適切ではない。想起は、現在の環境を対象とした知覚的探索を一時的に中断し、今はもう存在していない過去の事象に志向を振りむけ、それに対してかつて行った探索を反復する、身体化された（再）探索過程として理解される必要がある [Reed 1994: 278-292; Takagi & Mori 2017]。この再探索の作業は「かつてあったが、今はない」事象を対象とするため、知覚的探索とは異なる、「暗闇の中の手探り」あるいは「パントマイム」のような固有の不安定さと不器用さを帯びる。さらに想起者の志向対象が現在の環境に存在しないため、想起の聞き手が、想起者が探索しているものへの共同注意を構築することも困難となる。想起の聞き手は、想起者の不安定な言葉や身振りを手掛かりにして、その志向対象を後追いの想像することしかできない [高木 2011]。

この「不在の対象の探索」と「探索対象への共同注意構築の困難」という「二重の不可視性」が、想起者とその聞き手との間に絶対的な距離を生み出す。想起者が探索している環境は、探索の対象となる事象の欠落によって「不在の穴」が口を開けているが [高木 2006]、聞き手がそれを同じように覗き込むことは不可能である。想起者と聞き手は、物理的には同じ現在の時間に在りつつも、異なる時間的持続をもつ環境を生きている。聞き手が想起者に接近し、密着したとしても、想起者と同じ環境に立つことはできない。想像力を駆使して想起者の志向対象を捉えようとしても、それは常に想起から一步遅れた後追いに止まる。想起者を抱擁し対になることはできない。それゆえ想起者に暴力を行使することも不可能である。暴力にできるのは、想起者の身体を破壊して想起を中止させること、想起を他者から見えないように隠蔽すること、想起者の言葉や身振りの記録（表象）を事後的に改変することなど、その外的条件や産出物への侵襲に止まる。それが必然的に生み出す他者との絶対的な距離ゆえに、想起は原理的に自由な行為である。

死の間際、自身の体験を回想することによってバッチィは、現在の環境に唐突に不在の穴を穿ち、デッカーが決して立つことのできない時空間的持続をもつ環境を現出させた。これによって彼は、ほんの東の間ではあるが、レプリカントではない別の何者かに生成変化し、ブレードランナーとレプリカントを結びつける暴力の環から自由になった。その姿をデッカーはただ呆然と見つめるだけだった。ここでバッチィを「解任」（殺）して回想の基盤となる身体を破壊するか、自分が逃亡すれば、暴力を媒介した関係を回復することができたかもしれない。しかし、すっかり疲弊したデッカーにはバッチィを殺す気力は残っていなかった。逃げたとしても、死につつあるバッチィが追跡ゲームに復帰することは最早不可能である。こうしてデッカーは酸性雨に打たれながら、腰を抜かしてバッチィの生成変化をただ目撃することになった。彼はただ安心していただろうか。もしかすると、バッチィの回想によってブレードランナーとレプリカントの対が生み出す暴力の環から放り出されたデッカーもまた、蛹のように身を固めて、別の何者かに生成変化しつつあったのかもしれない。

2 自由な体験の語りと解釈の遅延、あるいは翻訳的接続

本特集に寄稿された各論文は、いずれもバツティの回想のように、他者が決して立つことのできない場所に立つ身体、それが発する声をめぐる論考であった。このうち2つの論文では想起の問題が扱われていた。立木論文では、Tという女性の母をめぐる感情に満ちた想起と夢の語り、「パロール」「ナラティヴの亀裂」「喪」などをキーワードとして、ラカン派精神分析学の視点で検討されていた。仲らの論文は、犯罪や虐待の被害を受けた可能性のある子どもや供述弱者から被害体験の記憶を適切に聞き出すためのインタビュー技法をめぐる研究報告であった。

前節で検討したように、想起は「不在の対象の探索」と「探索対象への共同注意構築の困難」という「二重の不可視性」を帯びているため、想起者と聞き手との間に絶対的な距離を生み出す性質をもつ。母の死に立ち会えなかったことを悔やむTも、司法面接に参加し被害体験を語る被害者（仲ら論文が検討したセッションでは模擬被害者であったが）も、オリオンやタンホイザー・ゲートでの体験を語るバツティと同様に、現在の環境に不在の穴を穿ち、精神分析家や司法面接の聴取者が生きる環境とは異なる時間的持続をもった環境の中に自身を定位させていたものと考えられる。

これに対して西論文では過去の体験についての語りではなく、現在まさに生じている「痛み」の経験とその「翻訳」の過程が検討の対象となっている。西は「外的な刺激が神経細胞の「痛み受容体」を経て、脳の特定の部位で知覚される単線的な過程として痛みのメカニズムを説明」する従来の立場を批判し、痛みの感覚を「おびただしい数の刺激のパターンが中枢神経において選別され抽出された結果であって、限りなく多様な「質」をもった感覚が「痛み」という単一の言語で表現されているに過ぎない」とするロナルド・メルザックらの主張 [Melzack and Torgerson 1971: 50] を示した上で、「他者の痛みとの出会い」が「常に情動との出会い」であるとするロブ・ボデイスの指摘 [Boddice 2014: 5] に言及している。さらに西は文化人類学者ウィリアム・レディを参照しつつ「発話者にとって情動を表現するということは、他の誰にも観察することができない何かについて、何がしかの翻訳を差し出そうと試みること」[Reddy 1997: 331] である点を強調していた。

このように西論文において痛みは、医療者など他者が客観的に測定することができる神経生理学的な現象ではなく、他者には観察困難な、個々人が自身の身体において感受する多様な質をもった情動的経験として位置づけられている。想起が他者には不可視の時間的持続をもつ現在の環境の探索であったのに対して、痛みの経験とその表現は、内的環境としての自己の身体という他者とは本来的に共有不可能な時空間的持続をもった場所における経験の探索であり、想起と同様に他者との間に絶対的な距離を生み出す行為であると言える。

このように本特集に寄稿された各論文では、他者が接近することが原理的に困難な個人的な環境の探索と、そこから生まれる語りをいかに聴き取るのかということが問題となっていた。以下、このように個人的な環境を探索し語る者を「体験者」、その声を絶対的な距離に隔てられた位置で受け取る者のことを「聴き手」と呼ぶことにする。

3本の論文にみられるもう一つの興味深い共通点は、体験者の声に直面した際に聴き手がとる姿勢である。ブレードランナーのデッカーは、バッテリーの唐突な回想を、腰を抜かして為す術もなくただ聴いていた。相手に接近し抱擁（破壊）する試みを中断し、むしろ後ずさりしながら体験者の体験の発露である言葉をただ聴き取る。このような聴き手の受動的とも言える姿勢である。

立木論文では、患者の語りの聴き手となる分析家の姿勢について「患者の無意識の宛先になる」と端的に説明されていた。いわゆるナラティブセラピーでは、クライアントが現実を把握する際に用い、それゆえにクライアントを閉塞状況に追い込んでいる現在のナラティブを、セラピストとの共同作業（現実の読み直し）を通して、より積極的でダイナミックかつクライアント自身の「腑に落ちる」ものへと書き換えていくことが目指される。この際、ナラティブはクライアントが現実を意味づける個人的かつ社会的な枠組として機能する。それはクライアントの体験から特定の箇所を複数選択し、それらを時系列的に配置することで、体験が内包していた様々な矛盾や混乱を隠蔽し、クライアント本人にとって、そして同時に他者にとっても了解可能な社会的な現実へと成型するという作業を通して達成される [浅野 2001]。すなわちナラティブセラピーにおいてクライアントとセラピストは、ナラティブの枠組を媒介として、互いに接近（抱擁）し、一つの対として、社会的に容認可能な体験の説明を産出する。この意味でナラティブは個的な水準での体験の探索やその過程の表出であるというよりもむしろ、そうした個人的な水準の事象を了解・共有可能なものにする社会的な水準での意味生成行為である。

一方、立木の論を踏まえれば、精神分析において分析家が患者と抱き合い、対を形成して語りを生み出すことはないと考えられる。立木論文で示されたジャック・ラカンの六つの命題の第2項が指摘するように「規則上、〔分析家は〕満ちたパロールや一貫性のある言説のほうに主体を導くことから身を隔て、主体みずからが自由にそれを試みるがままにさせる」からである。自由に語ることを許された（求められた）患者のパロールは、自由であろうとするがゆえに、却って避けたい不自由さを被る。患者自身の無意識の欲望がパロールに衝突し、「言い間違い」「機知」「多義性」といった「断絶」「傷」「ひび割れ」が刻印される。こうして到来した「聴きとることが難しいパロール」が、分析家によって事後的に読まれ、解読され、解釈されることになる。

聴き手が体験者と対を形成せず、むしろ後ずさりして、体験者に自由に体験を語らせることで、個的な水準（＝無意識）に由来する不自由さ（＝亀裂）を語りの内部に生じさせる。立木論文で示された、精神分析におけるこのような分析家の位置取りと、仲らの論文で検討されている「自由報告」を軸として構造化された司法面接における聴き手の位置取りは、治療と法的な供述証拠の収集という目的の違いや、精神分析学と認知心理学という背景理論の違いはあるものの、非常によく似たものになっている。

刑事事件の捜査の過程で実施される被疑者・被害者・目撃者などからの供述聴取では、聴取者による誘導や供述者による聴取者への迎合がしばしば問題となる。たとえば「Aさんはその店にいましたか」という質問は、「Aがその店にいた可能性」を供述者に暗示する誘導的効果をもつ可能性があり、また「聴取者はAが店にいたことにしたいんだな」

と供述者が聴取者の意図を察することで迎合を促進する可能性をもつ。供述聴取は本来、供述者が事件をめぐる個人的な体験を自由に想起することを徹底して促進する必要があるが、聴取者の不適切な働きかけによってしばしば、供述者と聴取者の対による共同的な過去表象の産出過程へと変容してしまう。こうした聴取者の不適切な影響は、子どもや知的障害者といったいわゆる「供述弱者」においてより顕著に問題となる。

このような事態を避けるために、聴取者による供述者への影響を最小限にとどめるかたちにデザインされているのが仲らの論文で取り上げられている NICHD プロトコルをはじめとする司法面接技法である。これらの面接技法では、たとえば「オープン質問」の適切な使用などによって、聴取者の発話が供述者に対して誘導や迎合の効果をもたないように徹底して配慮されている。供述者が誘導や迎合を媒介とした対を聴取者と形成することなく、自身の個人的な経験を自由に探索し、より多く語るよう促す聴取技法である。

こうして司法面接において供述者は、事件にかかわる自分の体験をできるだけ多く言語化するという只求められる会話の枠組のなかで、自由に想起を展開し供述を産出することを求められる。ここで供述者が実際に事件を体験している場合、その語りには固有の体験内容の説明と、それらと他の客観証拠や供述との対応・一致が確認されるだけでなく、「不在の対象の探索」と「探索対象の他者からの把握困難」という「二重の不可視性」に由来する独特の揺らぎ、曖昧さ、ぎこちなさといった想起固有の不自由さ（亀裂）が浮かび上がることになる。一方、実際には事件に関する体験をもたない者、体験の一部を隠そうとしている者、つまり体験者を偽装する虚偽供述者の場合、想起固有の不自由さ（亀裂）は生まれず、想起を偽装することによって由来する別の不自由さの痕跡（亀裂）を残すことになる。NICHD プロトコルの場合、面接が実施されている間、聴取者は、そうした虚偽の兆候が発露したとしても、会話のなかでそれを特に問題にはしない。ただより多くの「想起」を求めるだけである。面接の過程で発露した虚偽の兆候が徹底的に検討され、批判されるのは、供述者の語りが証拠として録音記録や文書に固定された後で展開する捜査、鑑定、裁判などの場においてである。司法面接においても、供述はただ語られ、聴き取られてから、事後的に読まれ、解読され、解釈されるのである。

このように精神分析のセッションや司法面接において聴き手は、体験者の自由な語りに干渉せず、そこに様々な不自由さ（亀裂）を浮かび上がらせたうえで、評価的、解釈的な介入を想起が終結するまで意図的に遅延させていた。一方、西論文で検討の対象となっている在宅看護師たちは、当然のことながら、痛みを訴える患者への対応を大きく遅延させることはない。看護師たちは、患者の状態をきめ細やかに読み取り、必要なケアを探り、随時それらを実行に移していた。このような対応は、看護師たちによって患者に「寄り添う」と表現していたが、これは看護師が患者を「抱擁」し「対」となることとは決定的に異なる実践であると思われる。医療者による患者の「抱擁」とは、すなわち医療者の世界で共有されている医学の解釈枠組を用いて一方向的に患者の訴えを理解し、対処することであり、これによって医療者と患者との間に、医学的な処置の提供者と受け手という「対」が構築されることになる。これに対して西論文の看護師たちは、患者の痛みの完全

な把握や測定が不可能であることを前提としたうえで、徹底して、痛みの体験者としての患者の訴えの「聴き手」であろうとし続けたように思われる。このとき鍵になるのが看護師らの「寄り添う」という位置取りである。この表現は現場の言葉遣いなので、その内実の複雑さを論文での記述のみから正確に捉えることは困難であるが、一つの鍵となるのが、これと結びついて西が示した「翻訳」という概念だろう。患者の痛みの状態を確認するために用いられる「フェイス・スケール」と呼ばれるツールは、医学の視点で客観的に定義可能なものとして痛みを測定する装置ではなく、患者自身の痛みの経験の内的な変化を知る手掛かりの一つとして使用されるという。ここで興味深いのは、フェイス・スケールが顔のイラストの配置によって、質的で曖昧な患者の現在の痛みの経験を、それまでの痛みの経験と対比したうえで量的に表現できるように支援していると同時に、「スケール」という客観的な「測定」を想像させる体裁をとることで、患者の身体について、その客観的な状態を「測定」し「管理」することを基本的な姿勢としてもっている医療者の「くせ」にも「寄り添って」いる点である。こうしてフェイス・スケールは曖昧で情動的な内的経験の時空間に立つ患者と、客観的に測定・管理可能な事象の時空間に立つ医療者が、事象に対するそれぞれの姿勢を「ある程度」保持したまま接続することを可能にする媒介的なツールとして機能することになる。ここで「ある程度」というのは、フェイス・スケールを利用することで、患者は実際に経験している痛みを相当にシンプルな量的表現に縮約するために姿勢を「ある程度」変化させることを求められ、医療者は実際には客観的な測定ではないスケール上での痛みの表現を理解するために、患者とのコミュニケーションを通して見いだされた状況を視野に入れた文脈解釈的な理解を試みるという姿勢の変化を、それぞれ求められるからである。西論文でいう「翻訳」とは、このようにフェイス・スケールを媒介として、医療者が事象を量的に把握するという常態的な姿勢を保持したまま、患者の質的な情動体験の世界を読み解き、実践的な対応を構想する一連の過程であると思われる。患者の痛みの客観的な測定や主観的な共感は、どちらも医療者が患者を自分の世界に取り込み一つの対をつくり出す暴力的な作業である。一方、フェイス・スケールを媒介とした患者とのコミュニケーションは、患者と医療者の間の絶対的な距離、位置取りの違いを保持しつつ、両者を実践的に接続する試みとなっていた。他者が決して立つことのできない場所で身体が発する声に対して聴き手が取り得る、精神分析や司法面接とは異なるもう一つの姿勢として大変興味深い。

3 おわりに

ここまで立木論文、仲ら論文、西論文での議論を、映画「ブレードランナー」の "tears in rain monologue" における回想を入り口として、想起や痛みの体験者が発する声と、その聴き手がとる姿勢という視点で検討してきた。いずれの論文でも、想起や痛みの体験を聴き取ることが求められる現場において、人々が互いに抱擁し、対を形成し、同じ世界を生きることを求める社会的な水準でのコミュニケーションではなく、人々がそれぞれ異なる時空間的持続の中に立ち、そこに生まれる絶対的な距離に隔てられながらも、他者の声を

聴き取ろうとするもう一つのコミュニケーションの回路が生まれていることが示されていた。「患者の無意識の宛先になる」「自由ナラティブを用いた供述聴取」「翻訳」といった各論文に示された聴き手の姿勢とそれによって生み出される体験者と聴き手の関係の様態は、コミュニケーションが社会的な水準で展開する事象であることを当然視してきた従来の諸アプローチに対して、「個的な水準での出会い」とでも呼ぶことのできる、まったく異なる視座でコミュニケーションを捉える可能性を突きつけるものである。今回の特集をきっかけとして、こうした他者の体験を巡る「もう一つのコミュニケーション」についての議論が深化することを期待したい。

<参照文献>

- 浅野智彦 2001 『自己への物語論的接近——家族療法から社会学へ』 勁草書房。
- 高木光太郎 2006 「『記憶空間』試論」西井涼子・田辺繁治編『社会空間の人類学——マテリアリティ・主体・モダニティ』世界思想社、pp.48-64。
- 2011 「回想とディスコミュニケーション」山本登志哉・高木光太郎編『ディスコミュニケーションの心理学——ズレを生きる私たち』東京大学出版会、pp.137-157。
- Boddice, Rob 2014 Introduction: Hurt Feelings? In Rob Boddice ed. *Pain and Emotion in Modern History*. London: Palgrave Macmillan, pp. 1-15.
- Melzack, Ronald & Warren Torgerson, 1971 On the Language of Pain. *Anesthesiology* 34 (1): 50-59.
- Reddy, William 1997 Against Constructionism: The Historical Ethnography of Emotions. *Current Anthropology* 38 (3): 327-351.
- Reed, Edward Steven 1994 Perception is to Self as Memory is to Selves. In Ulric Neisser & Robyn Fivush eds. *The Remembering Self: Construction and Accuracy in the Self-narrative*. New York: Cambridge University Press, pp. 278-292.
- Takagi, Kotaro & Mori, Naohisa 2017 Approaches to testimony: Two current views and beyond. In Brady Wagoner ed. *Handbook of Culture and Memory*. New York: Oxford University Press, pp. 133-158.

Listening to voices from another place

Kotaro TAKAGI

Keywords: remembering, pain, absolute distance, encounter at the level of individuals